

オーディオ実験室収載

モーツアルト盤を聴く(88)(HP 収載) —最新アナログシステムでの試聴(88)—

1. 始めに

前報(87)に引き続き、新たに入手したモーツアルトのアナログ盤を最新アナログシステムで試聴していきます。

2. モーツアルトのアナログ盤の試聴方法

モーツアルトのアナログ盤の由来およびアナログシステムの状況は前報(1)のとおりです。今回は、LINN LP-12 を使用します。

試聴システムは仮想アースに加えて、スピーカーの接続に NRF-005T の処理を行い、300B アンプにも NRF-005T の処理を行っています。

音源は、新たに入手したモーツアルトのアナログ盤を使用していきますが、今回から宗教曲です。

CBS SONY 20AC 1937

モーツアルト レクイエム ニ短調

ブルーノ・ワルター指揮ニューヨークフィルハーモニック

3. モーツアルトのアナログ盤の試聴結果

CBS SONY のモノラル盤ということで、Columbia、逆相、第4時定数 Low で聴いていきます。

ジャケットには、録音は1955年で、デジタルマスター使用と記載されています。録音も古く、リマスター後にカッティングされており、ナローレンジで盤質もよくありません。そのため、オーケストラや合唱の分離は十分ではありませんが、ソリストの声はよく通り、この曲の良さと当時の演奏水準は何えます。

なお、モーツアルトのレクイエムのアナログ盤については、[アナログプレイヤーの比較試聴\(36\)](#)で下記の盤について報告しています。

ドイツグラモフォン MG 2299

カール・ベーム指揮ウイーンフィル

ドイツグラモフォン 138767

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

harmonia mundi HMM332292

レネ・ヤコブ指揮フライブルグバロックオーケストラ

4. まとめ

ターンテーブルアキュライザー、ダンパーフレイク、**Crystal E**などの総合的な効果として、録音も古く、ナローレンジで盤質もよくありませんが、何とか、この曲の良さとワルターの当時の演奏水準は伺えます。

以上